

香葉



1972

NO. 3



目 次

深處に乗り出せ……………	下 田 哲	1
現状と将来計画……………	林 淳 三	2
周恩来小語……………	柴 三九男	3
柴先生の思い出……………		4
「ありがとうとごめんなさい」……………	江幡 玲子	6
「展 望」(先生方のページ)……………		8
「香報室」(卒業生のページ)……………		11
集いの窓“お久しぶり”……………		16
覚え書(三) 一女専・短大小史……………	上市 二郎	17
四十七年度総会報告……………		19
柴先生記念感謝会……………		19
母校ニュース……………		22
編 集 後 記……………		24
表紙……………	関 頼武氏	カット……………青木千恵子

深處ふかみに乗り出せ



宗教主任 下田 哲

アメリカに滞在中、二人の恩師の説教を聴く機会があった。一人は、ロス・アンゼルス日本人たちが、日本への宣教師として送り出し、ICUの教授として、かつて日本で働かれた豊留真澄博士。もう一人は、関東学院大学で宣教師として、又、教授として独特な働きをされたジェニング師。その説教のテキストは、何れもルカ五・四の『深處ふかみに乗り出し、網を下して漁れ。』

『豊留先生は、当時、東南アジアで宣教活動をしておられたが、台湾での伝道者養成の講座開催の光景をスライドを用いて話された。「宣教とは冒険である。私は太平洋を飛行機で飛ぶたびに、あの広漠とした海に落ちたら、と考えないことはない。深處ふかみとはこういう海の真中のことだ。こういう処に乗り出すという冒険が、宣教である——。』ロス市や近郊の一

世、二世の日本人で満堂埋められたこの集会では、近く始められようとしていた日本の四圍に於けるクルセードのために熱心な祈りが、なされていた。

ジェニング先生は、バークレーのバプテスト教会の牧師であった。米国で最もラデイカルといわれるカリフォルニア大学のバークレーキャンパス、その正門前の大通りを埋めるヒッピーの大群。ジェニング先生と最初にこの群れを見た時、私は乞食の大集団かと驚かされた。加うるにハイレ・クリシュナという奇妙な群れ——。アメリカのルツボのようなこの町に於て、ジェニング先生は、これらの若い人々のために、一夏、教会で夕食を提供したり、町の医療活動に協力し、又キャンパスで騒ぎが起るたびにかけつけるといった精神的な積極的な働きをしていた。

この先生の教会に出席して聴いたのが、やはり『深處ふかみに乗り出せ』教会をあげて、これらの問題に積極的に取りくみ、若い人々のために努力しようというアツピールであり、事実教会はそのための努力を既になしつづつあったのである。

福音宣教のための、まさに保守と革新の対照とも云えるこの二人の恩師の話、そして活動。しかし、どちらも、その各々の立場に於ての使命への全生命を賭けての「前進」であると思う。

キリスト教主義学校として歩んで来た、我が関東学院女子短大に於て、今、『深處ふかみに乗り出す』とは、いかなる意味をもつ事柄であるのか、しきりに考えさせられている今日この頃である。

現状と将来計画



学長 林 淳 三

一般に短大の数が今日のように増加したのは、四年制大学に比べ規模が小さく、きめ細かい教育ができるという特徴とともに、二年制度ということが、女子高等教育に定着したためでありましょう。しかし最近では主として経営上の理由から学生数をふやす傾向にあり一、〇〇〇人以上の学校も珍らしくなくなってきました。

過去の記録によると、本学も昭和三十五、六年頃までは、学生数三〇〇名前後であり、その当時在学された諸姉は、家族的な雰囲気になつたかしい思い出となっていることと思われまふ。それが今では九〇〇名の大世帯になり、短大としての小規模的特色が、幾分薄れてきました。しかし、一方において全国の私立短大の中には年々学生数が減少して衰退し、まさに廃校の危機に直面している学校が二、三にとどまらずあることから考えると、本学は益々繁栄しているとも解釈できます。

学生数の増加は当然校地の拡張や校舎の増設が要望されることになりまふ。学生数の増加と校舎校地の拡大は学校経営とからんでまことに私学のいたちごつことなっていますが、本学のようにもともと校地が狭く大学と共有施設の多いところでは独立した校地校舎を確保し、主体性をもった教育環境を得る機会にもなりません。

すでに香葉第一、第二号で述べましたように、現在の短大女子寮のあるハンソン山跡に、本学専用の用地を確保し、そこに三期に分けて短大校舎を建設することとなりました。そして昨年度には待望の体育館が完成し、本年度は第一期工事の鉄筋五階建校舎を建築しております。この校舎には昭和四十八年度から開設予定の幼児教育科の講義室、絵画工作室、小児保健実習室、心理実験室、リズム教室等と、図書館短大分室がつくられ、また第二期工事が完成するまで国文科もここに移転します。

四、五年後には第二期工事として短大本館（七階建、英文科、国文科教室、研究室）と付属事務局館の建設が予定され、さらに四、五年をへて第三期工事として家政科館（七階建、一階は食堂）が計画されております。

こうして約十年後には、ハンソン山跡約一〇、〇〇〇平方メートルの校地に、関東学院女子短期大学の校舎が建ちならび、二、〇〇〇名近くの学生が学ぶことのできる施設を持つことになるでしょう。これが夢にならないよう、私共教職員は努力しますので、卒業生諸姉のご支援をお願い致します。

（将来の女子短大校舎配置模型の写真が5頁下段に掲載してあります）

周恩来小語



柴 三九男

毎年訪れた伊豆・天城山荘の入口に、湧水栓があって「わが与ふる水は彼の中に泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし」とヨハネ4:14の有名なことが刻みこまれている。いくたびこの山荘でこの聖句が語られたことか。近ごろは水も枯れ、山荘の自然また昔日のごとくではない。

天城峠の山中で愛新覚羅・慧生（旧満洲国皇帝溥儀の弟溥傑氏長女）がその若い生涯を自ら閉じたとき、かれらを送った熱海から寄せた運転手は、ここで最後の水を飲んだと語った。

中国より先に『周恩来語録』が日本で出たが、それには慧生の死を悼む項があった。六一年溥儀氏をはじめ愛親覚羅一族を前にして語ったという。Aisin-giuroのは金、Gioro には氏族（-sin）の意これが他の覚羅家の中にあつて、清の国を支配した。彼女がまだ子供のころ、周總理は手紙をもらつた。その手紙は、いまでも保存して

いるが、立派なもので、その積極性と誠意にうごかされ、獄中の皇帝・皇弟二人を釈放せねばならないと決心したという。

慧生の母浩夫人は嵯峨家の出身、その半生は『流転の王妃』に自ら語り、この書は慧生に献じられているが、周總理に出した手紙ははじめ母にも告げなかつたらしい。その大意はそこにもあるが、文通をしたいと願つたもの。その結果、旧満洲・撫順の消印のある返信が目赤にとどいたという。

慧生が死んだとき、父・溥儀氏は獄中から長い詩を送り、それを讀んだ周總理は、人の親として泣けたという。この詩も『流転の王妃』にのせてある。写真があればいただきたい、生前願いをかなえることのできなかつたそのつぐないをしたいといつた。この時にはもう浩夫人も北京で夫君のもとにあり溥儀氏も文史研究委員会専門委員となつていた。次女娉生も同行し、周總理は北京にとどまるよう希望したが、日本に帰つた。總理はいつでも北京にくるよう、いつでも取計らうといつた。

浩夫人は『食在宮廷』という本をも出している。宮廷の豊かな料理を解説し、その説によるとこの宮廷料理が民間に洩れて、北京料理になつたというので、まさにそうだと思ふ。

日中復交の鍵は台湾問題であるという。その解決は蔣氏が大陸に帰り、閣僚以上の職につけばよいと五二年十一月周總理はブノンベンで記者に語っている。最近東南アジア共産系筋からその漸移的復帰条件がつけられてると北京電にある。

（後記、香葉会から下さつた御厚意を末文ながら、深謝いたします）

柴先生の思い出

—香葉会の光となつて—

井口 安喜子

軒の風鈴がしきりに鳴る。もう立秋だ。柴先生が御定年を迎えられ、教授会を去られてより最初の夏休を迎えた。先生の印象といたら、先生は何時も明るく、和やかであたたかく、広く深いものを湛えて居られる。

先生から教えをうけた数多くの卒業生は、先生にお父様の様な思いで接し、御慕い申上げてきた様に思う。先生その全御人格から滲み出てくるそれらのものの根本は、先生の長く深い御信仰生活によるものであろう。

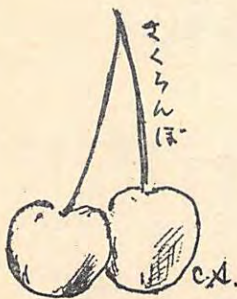
先生の思い出の中でも心にしみているものは天城山における柴先生ではなからうか。あの大自然の中で、自然と交り、人と交り、神と交る。との先生のお教えは深く心に残っている。また、先生の授業前のお祈りは学生の間であまりにも有名である。

中国を論じ、最近は自然破壊の公害を憂え

て論じられ、また教育も研究も信仰の上に考えたと思うと云われるキリスト者柴先生も日頃は、寸暇を惜んでスケッチを楽しまれ、和歌を詠まれる。どちらもすばらしい。

一時は危ぶまれた慶応病院での長い御入院生活中に、和歌は始められたという。

先生、いついつ迄も御健かに短大のために香葉会のために光となつて私共を御導き下さりませ。(家政科食物栄養専攻主任教授)



—先生とリトリート—

秋葉 あつみ

あれは二年生のリトリートの時でした。午後の自由時間、私達は各々思い思いの事をし、て暇をつぶしていました。そんな中で私は、友人と柴先生、御園先生を囲んで世間話に花

を咲かせておりました。main theme であつた「狭き門」のアリサの生き方を語り、或いは学生運動の話、先生の思い出話、赤城にまつわる昔からの話などで時間はアツと云う間に過ぎ去ってしまったのを覚えております。唯でさえ教授と学生間、或いは親子間の「断絶」がさわがれていた時でした。実際に、ともすれば友人同志でさえ話し合いを忘れがちな私達です。寝食を共にし、心を合わせて一つのものを考え、語り、完成させる。その努力の中で、私達はおのれをあるいはお互いを見つめ知ることができのではないでしょうか。リトリートの意義は、このような中に存在すると思えます。と云うわけで私にとって柴先生とリトリートは強烈に脳裏に焼きついているのです。私達の青春の悩みを、或いは就職の相談にも気軽くのって下さり、お年を感じさせない若々しい御意見を聞かせて下さいました。ベレー帽をかぶり、ステッキを持ったあの先生独自のスタイルが関東学院のキャンパスに見られないのかしらと思うとき……然し先生はこれからも学校にいらして後輩を私達と同様に御指導下さいますとのこと、いつまでもお元気で青年柴先生でいらっしゃることをお祈りしております。(短英20)

―旅を共にして―

伊藤 精彦

この度、柴先生が定年を迎えられました事は我々二部の卒業生には非常に淋しい気持ちがあります。実は去年このことについて知らされておりましたが、いざ現実とその時点に立ち至って見ると、なお一層の非哀感を覚えるのです。

私共二部の学生は昼間働き夜間疲れた身に鞭打って勉強に努める関係上、授業中居眠りをする者がいても優しく注意なさって、むしろ同情的な気持で私共二部学生に接しておられたと思っております。そんな関係で我々二部学生は、先生に親愛感を持ち先生も又愛情をもって御指導下さった事を厚く感謝する次第です。

卒業の際の記念旅行（関西方面）は私が中心となって計画をしたのですが、その計画の中で奈良及び京都が大部分を占めているので私が一つ柴先生も同行していただいで歴史的考察を現実に説明してもらったかどうか、と云う事を提案したとき全員賛成してくれた

ので先生に早速交渉したところ、最後の機会だから万難を排して同行しよう、と心良く同意していただいたとき非常に嬉しかった事は今も心に残っております。

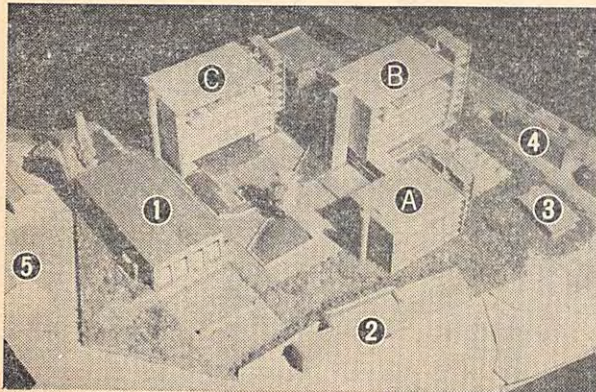
そのとき撮った写真を今見るとその時代の先生は未だ元氣一杯頭の毛も黒々としておられました。現在の先生は白髪瘦身、十七年間の歳月がこんなにまで人間の外見を変えてしまうものかと感慨無量です。いつまでも先生には若々しく居てほしかったと思います。先生には定年後も囑託として学校にお残りになる由益々お元氣で御指導の程切に望んでやみません。

(短英二・3)



写真説明

- ① 女子体育館（昭47年3月完成）
- ② 学寮Ⅱ女子寮（昭39年完成）
- ③ 宣教師館
- ④ 教職員アパート
- ⑤ 小学校
- ① 第一期校舎（幼児教育館）建設中
- ② 第二期校舎（英文・国文科館）
- ③ 第三期校舎（家政科館）



—将来計画完成予想 校舎配置模型—

「ありがとう」と

「ごめんなさい」

——相談室に思うこと——

江 幡 玲 子

「仕事がいやだというのではないんです。とにかくいきたくないんです。会社のこと考えるとドキドキしてくるんです。お医者さんはどこも悪くないといいました……」

今春短大を卒業して、十人に一人という競争で入社したというのにノイローゼになりそうだという相談がありました。

よく聞いてみると、一緒に入社した同僚と一寸したことから仲たがいで以後は朝あっても、かえりにも挨拶はしないし、となりの席なのに電話をとってもらってもありがたうもいわないで二人で顔をそむけているというのです。二人が人間なら、そしてまわりの人が人間ならみんながまいてしまうのは当り前です。

いやな人だけと相手に関係なく礼儀だから思い切って「おはようございます」
「さよなら」
って大きな声でいつてみたら……と提案してみました。あんないやな人にそんなこというくらいなら……なんて強情はっていました。

不思議なことに「おはよう」「ありがとう」「ごめんなさい」「さ

よなら」と大きな声でいってみると、やたらに連発してみると、そんなにいっまでも怒った顔をしていられなくなってしまうものです。

若いというのに、せまい心でたった一人の人をにくんでいても、仕方がないということに気付いてくれた彼女は、ノイローゼになりそうだなんていわずになりました。

この4つの言葉が、特に「ありがとう」と「ごめんなさい」が影をひそめると人の心は貧しくなるようです。「すみません、すみません」という人がいます。ありがたうもごめんなさいもときにはさよならも一つのことばで代用している様です。

思春期となんとか期

中学二年になる息子が、すぐ口応えをする上に叱るとにくまれ口をきいて、親にむかって「白ブタ」なんていいます。学校は一体何を教えているんでしょうね。こんなに私が苦勞しているのにお父さんは叱ってもくれないし、うるさいとか、お前が悪いとかいって私を叱るんですよ……。ととどめなく話すお母さんは涙さえうかべていました。

口の悪い殿方にいわせれば、中年のママ達は座敷ブタというのだそうですが、かわいい息子からいわれて、それがピツタリしているのならおこることもあるまいにと思ったりします。

昔から出来の悪い息子のことは豚児というのだから……あなたにも自覚はあるのね……とかいってからかかってみたらとすすめてみましたが、そんなバカなことはいえないといわれてしまいました。そういうお母さんの中にはユーモアのかけられない様でした。これじ

やあ息子もパパも大変だろうに……とまだ見ぬ人に同情したくなり
ます。

子どもが思春期になる頃、親は人生の二大変革期といわれるもう
一つの？年期に近くなりつつあるわけです。血圧は心配だし、息切
れはするし、あちこち痛くなるし、そしていくらやっても片付かな
い家事の山とできています。パパも四十代、もはや若気のいたりでな
んていえない年令、社会の中堅として忙がしく、教育費から老後の
安定まで考えて働いています。健康だけがたよりです、といわんば
かりに我が家に休息を求めます。

自分の事で精一杯の家族の一人一人は、それぞれに思いやりの心
をかけられることを望みます。みんなが望んで与える人のいない家
庭になってしまいます。

思いやりと ゆとり

思いやりも、ゆとりもなくなれば人の話をゆっくりと聞くことも
そのことばのうしろにかくされている心を感じることもできなくな
ってしまいます。外でニコニコとしている人が、家族に対しては感
情をむき出しにします。みんながそうだと、いらいら一家にな
ってしまい、誰もが家へ帰えりたくなくなってしまいます。

そんなとき、ママが大きな声で「おかりなさいい」//ごめんねー
ごはんおくれて」//あーらどうもありがと……ちょっと机ふいとい
て……//といったら誰もおこれなくなります。すこしくらいの感情
のゆきちがいなんて気にしない、腰のすわったママのニューモアを子
ども達も、また亭主族も求めているようです。

ノイローゼにならないためには、子どもを非行化させないために

は一体どうしたらいいでしょうか。ときかれれば、思いやりとゆと
りのある心でものを考え、行動することというより他ないことを毎
日体験しています。

ちよつと立ちどまって、空を見あげて深呼吸して、三春台や六浦
のキャンパスを思い、あの頃の彼は今頃どうしているかな——とニ
ヤヤしてみるのもまたたのしいと思うのですが……。そしてそこ
にふつと忘れていたもう一人の自分を見つけてみるのも秋の日のゆ
とりかと思えます。

(短英5)

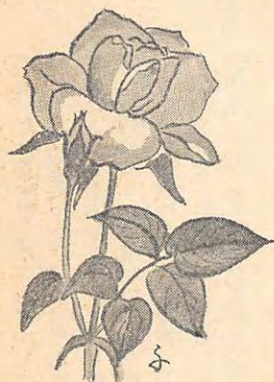
筆者紹介

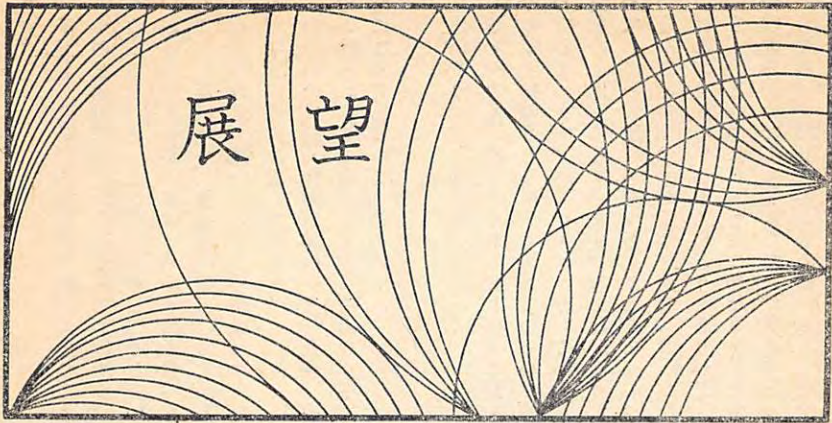
警視庁少年相談室相談員及び警察学校講師と上智大学講師

著書は「父と母への赤信号」

(安田道夫氏と共著)

十月に出る予定のものは「屈折の世代」





末の松山

岡松 和夫

学校の用事で仙台に出張したついでに、末の松山を見に行った。仙台駅から仙石線の電車に乗って十数分、多賀城という小駅でおりる。駅から末の松山までは、いくらの距離でもない。『奥の細道』には、「末の松山は寺を造りて末松山といふ。松のあひあひみな墓原にて、はねをかはし枝を連ぬる契の末も終は斯くの如きと悲しさもまさりて」とある。愛と死を結んだ無常感ふうのイメージである。

訪ねてゆくと、末松山宝国寺という小さな寺があり、その墓地の入口に、直径一メートルぐらいの松が二本空に伸びていた。一本は雷に打たれたのか、先が折れている。「末乃松山」と刻まれた石碑も建っている。例の百人一首の清原元輔の歌「契きな」も記されていた。

松を眺めて、特別の感興があるわけではない。寺も墓地も小さく、周辺は住宅ばかりで

ある。私は松の根元に腰をおろして煙草を吸った。暑い日だった。体中、汗まみれになっていた。快さがあるとすれば、もの好きな人間しか訪ねてこない東北のこんな場所にとにかく坐っているのだという実感である。

遠い旅先で、時々、こんな変な満足の仕方をすることがある。負け惜しみの満足なのか。
(国文科助教授)

花と私

宮川 喜代江

自分が何年かを過ごした場所からは何らかの影響を受けそれがいつのまにか現在の生活に根づいていることがよくある。

原爆の落ちたあくる年から三年、私は広島のある県立の女学校にいた。被服廠跡のいかにも戦後らしい校舎だったがまわりの野原には秋になると深紅と白とピンクのコスモスが一面に咲いて殺風景な世相とのコントラストが印象的だった。私は今でもコスモスが好きで家の庭でも毎年咲いている。大学の頃寮へ上る山道は夏でもひんやりとしていて、野あ

さみの紅紫やヨメナの淡い紫が目にしみた。七年前横須賀に移って来た時、前の空地にヨメナを見つけて嬉しかった。大学三年の頃新築された寮の中庭にはマーガレットの白が広がり五月の風にゆれて可憐だった。寮での土曜の朝の草とりは重荷だったが、今の私は庭で草とりをしていると、時間のたつのを忘れる。

皆さんにとって短大の二年間の何が今生きているだろうか。リトリートで得て来たためた友情だろうか。クラブでの活動とそこで語り合ったことだろうか。何はともあれ今の自分の生活は過去の蓄積の上に立っている。自分の過去と現在を肯定して生きたいものだ。時間をつくってお便り下さい。私の住所は以前と変りませんから。(英文科助教授)

雑感

佐藤 三郎

関東学院に来て私も既に六年目になる。早いようでもあり長かったようでもあり、氣持は一樣ではない。

初めて学校を訪れた時、当時はまだ、今の一号館もなく、短大館も未完成の状態であったが、事務長さんが七号館の屋上に私を案内して構内を説明して下さいました。一望のもとに鳥瞰できるその屋上で「正面の建物は今時にしてはめずらしい位に古ぼけているが、構内の奥には新しい建物が建っているのですね。」と私が言う、「これが院長先生のご方針なのです。」と事務長さんは答えられた。

つまり、正面の建物は、院長室とか、理事長室とか、学長室とか、事務室とかなので古いものでもよいのだ。しかし、学生達に教育をほどこす場は、良いものにしていかなくてはいけない。その結果、建物は人目に立たない奥の方から新しくなっていくというのである。

私はその説明を聞いた時にある種の感動に襲われた。俗っぽい言い方だがその院長の心意気のなかに恐らく関東学院の精神の如きものがあるのであらうと私は今でも思っている。この形のない精神をどれだけの人々が引き継ぎ、これをどのような姿で各自の日常生活のなかに生かしていくか、そこに関東学院の実在性がかかっているのだと思う。諸姉らのご健闘を祈ってやまない。(一般教育教授)

楽しい記憶

杉野 要吉

柴先生は津田左右吉の門下であり、その立場から私にも学問の視野を広めよと説かれることが多かった。津田史学が国文学の過去の発展の上に、隣接科学の立場から与えた影響は大きい。

その津田左右吉の学風や人となり、じかに接せられた先生から経験談風に伺うことがあったことは、私にとって一つの楽しい記憶である。また、次のようなこともある。

ベレー帽に杖、といういつも変わらぬスタイルでひとり歩く様子をお見受けするとき、ふと先生の淋しい一面を覚え、引きつけられることがあった。だから放課後など、学生を左右に従え鎌倉や称妙寺へと散歩に行かれる折々の先生の満足そうな笑顔は天下一品だった。

寮祭に遠路わざわざ、いつも率先しておいで下さるのが先生であったことは知る人ぞ知る。このように先生は、教師として、純なる

心でよく学生を愛せられた。学生をつき放して接することの多いわが身に照らして、私はそう思うのである。

それから先生を囲む聖書研究会。私はその会からの脱落者である。しかし会は、新しい人も加わり、徳永氏の研究室で先生を囲み今も熱心に続いている。時機到らば、私はまたそこへもどってゆきたいのである。

(国文科助教授)

“旅”

山口 和子

七月末、I出版社恒例の栄養指導夏期セミナーが神戸六甲山で開かれた。

東京からひかりで三時間半、大阪をすぎ現任日本で最も長いトンネルをぬけると新神戸駅である。列車が発着しない限り人影もまばらでひっそりした駅だ。しかしこの弁当はどれもおいしい。材料が良いせいだろう。

ここから会場Vホテルまで車で約四十分。山腹の神戸大学教養学部をすぎる頃からだんだん景色がよくなる。美しい緑だ。谿谷の変

化もすばらしく道路もよく整っている。平日のためか車も少ない。途中有馬温泉への道が分かれている。六甲山には一部上場の大会社の広大な保養所が多くホテルは割合に少ないようである。Vホテルは山頂近くで、一段さがった彼方に屋上に鶏のほこをつけた有名なOホテルがみられる。大阪湾をへだてて大阪市、堺の町並みが広がっている。この夜景は百万弗といわれるそうだが、さすがに美しく神秘的でさえある。

全国の大学から集ったご常連、新顔もテラホラの五十人が朝七時から夜十時までの討論会の多い一日のスケジュールを終り、それからそれぞれの部屋での歓談が、真夜中まで続く。

五泊六日の旅は楽しかった。

(家政科講師)



事務局へご協力を

会員の皆様にお送りした年賀状・学報等学校よりのもの、ならびに総会通知などが多量に返送されてきています。お送りしたものは、すべて無事にお手元に届くよう次の点に関しご協力をお願いします。

イ、結婚などにより住所・姓名が変更の場合は必ずお知らせ下さい。

ロ、転居並びに住所表示変更の折も必ず新住所をお知らせ下さい。

ハ、知人の変更を知った場合友人の消息としてご連絡下さるようご協力下さい。

関東学院女子短期大学

香葉会事務局

(横浜市金沢区六浦町四、八三四)
(電話 横浜(七八一)〇一四八)



この欄は、卒業生の皆様の消息、感想文、詩、和歌、俳句、隨筆、等の発表の場として、用意いたしました。短大 香葉会「香葉」編集局宛、次号への原稿を隨時お送り頂きたいと思っております。同封の原稿用紙を御使用下さい。

今月号の香報室は、特にテーマを「仕事」に絞って仕事を通じての随想をお願い致しました。

研究所

醍醐 けい子

私は現在、研究所の助手をしています。明治製菓中央研究所と云っても甘いイメージからは遠く、抗生物質の開発のほんの一部を手伝っている者です。新しいものはめったに出ませんが、研究発表に自分の記録が出たりすると「カンゲキ」というかんじです。

学校では食物栄養コースでしたが、わずかに栄養化学実験が役に立っているくらい、プロだから正確で細かいことまで要求されるけれど、自分のペースで実験ができます。

よく飲みに行ったりもしますが、上の人を立て、みんな仲良く見えます。傷つけ合ったり自分をさらけ出す話はありません。仕事というものを、私もそうですけれど、生活の収入源と考えている人が多いようです。薬を使わないというのが自然だと思われ、たく

さんの薬が出まわるのは反対、ということでも単なる収入源なのかもしれません。

大切なことは女性にとって、いや人間にとって、愛とか結婚が人生の目的ではなく、一生を通じて何かやること、つまり Life work というものを見つけ出さなくてはならないと思いますし、その中に仕事とか職業とかが入ると思っています。

(短家20)

栄養室から

伊藤 明美

私の属している職場は地下一階に位置している栄養室です。ここに私は栄養士として勤務して十年になる大先輩の栄養士と二人で忙しい日々を送っています。

私達の室のすぐ傍が調理室になっていて、そこで一般食と特別食、合わせて一回に一三〇〜一三五食が作られて患者の元に運ばれます。私達はそれぞれ午前と午後に分れて現場(調理室)に出て、調理、盛付、盛付された食事を総てチェックして間違いなく患者の元に届くようにして運搬車に乗せます。後は配

膳係の人がエレベーターで各病棟に持って行って病棟の配膳室でお茶を入れて患者の元に運ばれるという方法をとっていますが、適温給食という観点から見ると大きな問題を残しています。特に汁物の場合の配膳方法は現在検討している段階です。

次に栄養室の仕事ですが、現場以外の時はそれぞれの分野を各々の予定表に従って行っています。毎日の物資の発注、納品された物資の検収、献立作成、納品書の整理、給食材料費の食品群別の月別のトータルを出したり食料品受払簿の記入等を行います。

又、毎週火曜日は栄養指導日なっていて、通院、在院を問わず主治医の指導内容をもとに食事指導を心がけています。そして医療者の中で給食をモットーに今後とも進んで行きたいと思っています。

(短家20)



本国語について

井出田 幸子

短大では英語を専攻したが、どこでどう間違えたのか、日本語教育の分野に足を入れてまごまごしているこの頃である。

日本語教育と大きく「国語を教えておられるのですか」と大低の人が云い直す。「国語イコール日本語」という概念があるからだろう。

広辞苑には「①国語とは同一国家に属する国民が祖先以来継承してきた言語で、現にその国民によって使用されているもの。自国の言語。②我国固有の言語。日本語」と書いてある。

他国はどうだろう。シンガポールで「国語は何ですか」と尋ねれば、「マレー語ですが、公用語はマレー語とタミール語と北京語および英語です。特に一般人に使われている社会語は英語です」という答を聞くだろう。

こんな国ではどの地方の言語を国語に決めるかというようなことから内戦も起りかねない。

日本人はその点しあわせであるが、ある意味ではそのことが日本人が外国語を修得する際の障害になっているとも云える。

国語教育の対象は、既に日本語を話せる者だから、主として文法の理論体系や知識などから始められるが、日本語教育の対象は、日本語の知識が皆無の外国人のため、音声教育から始めることになる。丁度日本人が英語を習う時と同じである。

つまり外国語としての日本語教育である。踏み込んでみると仲々面白い分野である。これまで、我国は各国の文化の輸入におうわらわであったが、これからは我国の文化を輸出する意味でも、国語による日本語教育の富土の裾野的な発展を願っている一員である。

(短英二・12)

職場・仕事について

河名 義弘

私は郵政省に入ってから、今年で早二十年を經過し、丁度折り返し点に差し掛かっていることに愕然とすることがあります。

誰でもそうであろうが、仕事についた当座

は唯夢中であり、その仕事が組織の中でどのような位置付けにあるのか、或いはそれがどのようにして社会生活に結びついているのかなどということとは考えてもみなかった。

同様にして、成人式はまだ当分先のこと、況んや三十才などという年令が本当に自分にも巡って来るのかと甚だ頼り無い認識でこの頃を生きてきたようだ。

然し乍ら現実には三十八才となり、二児の親となつてしまつた今日、職場及び仕事の問題は私にとつても永遠のテーマであり、暗中摸索といふところであるが、どこかの職場でも課題となつてゐる青少年職員育成のための通らなければならぬ道であつたとは、皮肉な巡り合わせであるといへましようか。

教育過程の変遷に基づく価値観の相違が種々の困難な問題提起となつて、職場における様々な人間関係を従来以上に複雑にしてきてゐるところであるが、昔も今も仕事とは、各々の個人が人間として生きてゆく上での、それぞれ力量、能力に応じた責任分担を果すことと考へられますので、この本分を全うする以外の何物でもなからう。

私もこれを以つて仕事に取り組んでおり、青少年職員に対しても、この方向で自己啓発

させるべく対峙しています。

(短英二・10)

巨塔の中のはたち

沢口 和子

二十歳という年齢にも大分慣れて来て、近頃は余り意識する事もない。

卒業してから半年。だが社会というものは今だに肌馴染まない窮屈さを感じる。マスコミ関係の仕事に付きたいと思ひ、今東京放送(TBS)という得体の知れない巨塔の中の世渡り(?)も、自らが望んだ事であつて、人間の自由だとか、自主性だとか、そんなものを振り回せば明日にでもクビになるであらう。

この不可思議な世界には今までの私が人の話を聞き、頭で考へて、手探りしてゐた時から想像も出来ない様な、舌足らずのレンズの中には到底見る事の出来なかつた社会がそこにはあつた。

朝、今日は十一時から某繊維メーカーの新作のパンタロンの撮影。カメラの前で「さあ笑つて」足を前に伸ばして「と一時間余り

を過ぎると笑顔の中にも疲労は隠せない。夕方は番組のインフォメーション。三十分前にスタンバイ。マイクの前で時間内に話せる様に今日の内容を何度か頭の中で繰返してみる。五分前、マネージャーに呼ばれ最後の指示を受ける。

マスコミの鼓動を自分の手で聞きたいとこの仕事に入ったはずの私にしては、なんとも心細い緊張の一瞬である。

駄目になつたらその時までと、口では野垂れ死にをつぶやいてみてもそれほどタフではなく、といつて悪あがきして何とか糊口を儲ぐべく、じたばた恥をさらすわけにもいれない。ただ明日をも知れぬという考へが骨がらめになつていて、その日暮らしの習性が抜けきらない様なある種の大人には決してなるまいと思ふ。

(短国5)



ケース・バイ・ケース

外谷 碩子

家を出て電車に乗ると、きょうの仕事の予定は、と考える。

午前中は主に所内での相談で、本人よりも家族との相談が多く、よくよく困ったものですから、と云って保健所の医療社会事業相談室を訪れてくる。一番多い相談は、精神障害者をかかえてその治療のこと、費用のこと、生活のこと、自分を病氣と思っていない患者さんを家族がどう理解し、どう接していったらいかななどで、最近ではアルコール中毒の相談もふえてきた。

幼児の場合は、ことばの遅れや性格行動上の問題などで、母親が心配して来所する。ケースによっては病院、施設、福祉事務所、児童相談所等へ紹介したり、連絡したりする。福祉行政のたにおくれをしみじみ感じることもあるし、経済的なことではどうすることも出来ない心の問題での相談もあり、人を理解することのむづかしさ、人間関係のむづかしさをケースを通して、教えられることもあ

る。

問題をかかえ、困りはてて相談にみえた方が、いろいろ話しあつていくうちに、勇氣を出して困難な問題を解決していこうという気持ちになった時、私自身もよろこびと力が湧いてくるのを感じる。

家庭をもつても仕事を続けてこられたのは自分でやりたくてしている仕事だからなのだろうと思う。職場では家庭のことは忘れ、帰途につけば職場のことを忘れてしまう気持ちのきりかえの出来る性分も、こういう仕事を続けるのに向いているのかもしれない。

(短英1旧手塚)

旅のアレンジ

小西 千春

短大を卒業して、日本交通公社に入社した当時は、時刻表も読めなかった私。でも今は様々な、タイム・テーブルに囲まれて生活しています。

旅が好きでしたから、短大生活中に、しばしば、ニッカをはいての山登り、まるで山女のようにした。だからだらした山道をザック背

負って、もう二度と来るものか、と思いがながら登るのに、登りついてしまつと、不思議ですネー、ナンダカ、もう少し高い山でも登れるような気がして来て、とても元気になるんです。その上に、ビールでも飲めたら、もう死んでもいいような清々しい疲労と爽やかさで、いっぱいになるのですから。

自然は、人間を単純と云うか、元来の姿に近づけてくれるのだと思います。私は、この美しい自然に魅せられ、それに対応する、ちっぼけな人間の努力と疲労に魅せられ「旅」と云うものから、自分を切り離す事が考えられなくなりました。

だから今、ちっぼけな私の知識と努力をフル回転させて、「旅」のお手伝いをさせてもらっています。

現在の私の仕事は「海外旅行専門」の支店で個人のお客様の「旅」の準備から出発までを担当しています。様々な人と接する機会を持ってふと思ふのですが、私は何かの縁があって、此の人と旅の相談をしているが、もう二度と会う事はないかも知れない、そしてら急に一度の出会いが、とても貴重な事に思えるようになったのです。ちっぼけな私の小さな発見だと思つてます。

P・Rする気はありませんが、「旅」をどうぞ大切にして下さい。その為に私が必要でしたら、港区芝罘平町の日本交通公社、海外旅行虎ノ門支店のカウンターに、私を訪ねて下さい。喜んで御相談させて頂きます。

(短国5)

つらいことこそ

生きがい

根本 美香子

「好きなことを仕事にして、おしあわせですね。毎日が充実していて生きがいがあるでしょう」と、私は人によく云われます。そんな時、私は「ええ」とか「お陰様で」とか、あいまいに返事をしてしまいます。簡単に返事のできようもないものだから。

小さい時からバレリーナになるのが夢でしたから、少くともその望みがかなった現在、たしかに私はしあわせなのだと思わなければならぬのかも知れません。単に「踊る」ということだけを考えてみれば、舞台の上で、又生徒を教えていて、仕事に対する満足感に

素直に浸れる瞬間が何度となくあるようすが……短大を卒業して、それまで学業と平行してあくまでもお稽古にすぎなかったバレエがプロとしての仕事になった時から私の本当の苦しみがはじまったようです。

一日としてかかす事の出来ないレッスンはげしい肉体労働である舞台稽古、そしてその上に出来上った舞台。それだけであつたらどんなに苦しくつらくても、つらいからこそ生きがいがあると云えることでしょう。

しかしバレエは踊りだけでなく、音楽(オーケストラ)、無台装置、衣裳、照明等の総合芸術で大変費用のかかるものですから、日本のように国家の芸術に対する関心の全くうすい国においては、舞踊手は何もできず、しかも企業も一般の人達も殆どバレエに対して無関心の中で極く少数のバレエ愛好者と踊手達が、必死に、何かを創りだそうとしている。それが今の日本のバレエ界の現状なのです。

(短英二・12)

伊豆河津郷 峰温泉

「逆川」の案内が皆様のお手元へ!!

関東学院(六浦)教職員厚生会より過日、香葉会にご連絡があり、色々にご説明を受けました。厚生会委員の方々は既に2回程現地を見て参りまして、伊豆の島々が一望できる良い場所だとのご感想でした。

伊豆「逆川」について興和観光株式会社より詳しいご案内がパンフレットと共に皆様のお手元に届くことになっております。その節にはご一覧の上ご一考いただければ大変幸いと存じます。

集いの窓



第五回KMG会

親睦会

弦間 三郎

かつて存在した英文科二部の卒業生のうち明治学院大(昼・夜)へ編入学した同窓生でKMG会という集まりを始めて五年になる。KMG会については、「香葉」創刊号に、会の顧問をお願いしている園部治夫先生(現フエリス女子大教授・理事、本学講師)が書いて下さっている。

今春三月十九日に横浜で定例(年一回)の親睦会をもった。皆それぞれ健在で、話に花が咲いた。顧問の園部先生は、昨夏、韓国の

教え子達から盛大な招待を受けて訪韓した模様を話して下さった。

集まった会員全員の一一致した意見は、できれば、再度、社会に開かれた社会人のコースをつくってほしいということだった。

出席者…園部治夫先生、菊地庄吉(七回卒)、井出田幸子(十二回)、弦間三郎、御園和夫(十三回)、森谷弘、黒鳥佳臣(十五回)。

(短英二・13)

貴重な一夜

佐々木 清子

兵藤先生をゲストに迎えて一月二十二日横浜の食道園で五回目の同窓会を開きました。

当夜の出席者は、坪井勝利、有光桂子、井水伸、黒田義行、木村博、佐々木清子、吉川好美、斉田岑生、斉田和子(旧小柳)、根本美香子、大野恵一、樋口幹雄、村田弘、高橋晃蔵、以上(順不同)十四名でした。

最初は参加者の自己紹介、これも一年振りのことで、変化なしもあれば、波乱の生活を

送った人もあり、それぞれ元気でいたことがうれしく耳を傾けました。

中でもイタリーでイタリー語で喧嘩をした話には、ただただビックリ、英語を学んだものの、英語でそんなことはできないのですから……。

又、ブルガリアで行なわれたパレー世界のプリマコンテストのコンクールに日本代表として出場、第一次予選を並いる世界の強豪を向うに、堂々上位入賞、ソ連をはじめ北欧諸国では国をあげての応援、無論費用も国家負担、日本では私費と云うハンディにもめげず日本のプリマの名を、そして我ら大和撫子ここにありとばかりに、日本のため小粒ながら一人大いに気をはいた根本美香子嬢。

兵藤先生からは、大学紛争の話に触れて、「現代をどう生きるか」という宿題がだされました。夏までに又やろうという声もあったのですが、今夏はできませんでした。終つてから、二次会へと大半が繰りだし、電車の時間とニラメッコでそれぞれの専門の話に真剣に質問していました。気持ちよく話し会える場の欠除が毎日の生活の中で追われている私達に、充実した一夜が、いかに貴重かを教えてくださいました。

(短英二・12)

覚え書 (三)

——女専・短大小史——

上市 二郎

昭和二十五年三月、昼間部各科は認可されたが、夜間部英文科、工科、経済科は認められなかったので、四月より英文科のみ夜間特別講座が開かれることになった。勤労学生を対象とするこの特別講座は暫定のもので、正規の短大夜間部を設置すべく準備が五月頃より進められて、一応申請書類も完成し九月末日、文部省に提出した。

文部省からは十一月二十九日(水)に夜間部増設に関し、視察員が本学に来校され、書類審査並びに施設・設備の实地査察が終日行われた。当日は女専、短大、女子高生は上野の博物館の見学を実施して審査のために学校を明けたのです。

明けて一月十一日(木)には、夜間部の正式名称英文科第二部(入学定員八十名)とし

て、その認可が発表となった。早速、学校、会社、駐留軍基地(当時は米軍基地を駐留軍基地と呼んでいた)などへの宣伝、募集を行なって、英文科第二部の初の入学式が百五十六名をもって四月十六日(月)午後六時より挙行されたのである。

当時は、高等学校より直ちに進学してくる者は少く、一応社会の実務経験を身につけた者、現職の中学・高校の教員、駐留軍勤務者など、年令もまちまちで実に楽しい雰囲気をもっていった。

英文科第二部の学生は好学心の強い者が多く、卒業後進学して短大時代の職場を離れ、大学並びに中学・高校の教員になっている人が多いことは実に喜しいことである。

この頃の宗教活動は毎朝の礼拝はもとより学生生徒による祈祷会が、毎週一日授業開始前に開かれていた。学外活動にはよくフライヤージム(伊勢佐木町通り現在の秀竹裏)などが使用され、市内のキリスト教学校合同のクリスマスフェスティバルもこの年の十二月十九日午後五時よりここで開かれ、本学々生生徒の合唱隊が大変好評を博したのも印象的だった。

翌二十六年二月スタンレージョーンズ博士

の来日特別記念講演会が開かれたのもこのジムでした。宗教週間も秋以外に卒業礼拝を中心に二月に行われたり、六月には花の日を中心に計画されているが、いずれも午前の主題講演に対し午後はグループ懇談会を行っている。この年の夏は箱根湯本海雲荘で修養会が開かれているし、九月二十二日(土)には本牧八聖殿裏山の一日修養会(写真)が開かれ雨になった午後、御堂の中で懇談会や閉会礼拝を持ったのが印象に残っている。



二十六年三月には女専の第三回卒業生を送るに際し、同窓会について再三代表者と学校

側との懇談会が開かれたが、独立した同窓会となるためには卒業生の数も少く、諸活動も無理な点が多く、また将来法的（学校教育法第六十九条の二：昭三九年改正）にも短期大学は大学の枠の中におかれる関係も考慮されて、大学同窓会サンヨー会に籍を置いてもらうべく意向を当時のサンヨー会幹事に申し出た。正式決定はその年の五月の総会に於て行われたのです。

ついで翌二十七年四月六日には、女子高の卒業生の集いに於ても同窓会の問題が論議されている。学院には別に共学の高等学校があるが、経営も歴史も異なり、その上本校は技能教育を施す実業高校の性格もあって、この日、女専と合併しての同窓会に入れば種々な点で連絡業務がスムーズに行くことなどが考えられ、同じ同窓会に入ることが決議されている。そして長い間サンヨー会の一つの支部として活動を共にしてきましたが、会員数も三千数百名を越えるようになった四十五年四月より事実上の独立活動を始め、同年六月二十八日（日）に香葉会としての設立総会に於て正式に決定したのです。

この頃、業務に煩雑さを加えていたものに進適（進学適性検査）というのがあった。進

適は占領軍のアドバイスとかで、二十三年頃より二十九年頃までにかけて、文部省が実施していたもので、入学志願者の全員に対し、大学の入学試験以前に全国いっせいに統一問題で行われたものです。実質のねらいは、大学教育を受ける素質、知能があるか否かをみる、ということだったが、女子高を持つ本学としては毎年その説明会に出席し、種々手続きに時間をかけなければならず、その上受け入れる学生の進適指導などもあって中々大変であったことが思いだされる。

当時は四ツの女子専門学校（関東学院、青山学院、フェリス女学院、恵泉女学院）の交歓会があった。短大になってからもこれが引継がれていて、この年は青山学院で六月三十日（土）に開かれている。

交歓会というのは四ツの学校が順次当番校となつて種々計画し、文化面（英語スピーチコンテスト、演劇、討論会など）と、体育面（庭球、卓球、排球など）に於て日頃の練習成果を競い合つて互に友情と親睦を深め合う絶好の機会であった。六浦校地に移転してから本学が当番校になって、今迄と異つた種目ボートレースを平潟湾で行つたのを覚えてい

二十六年の学外行事は一月三日より湯沢のスキー実習が、七月には志賀高原のキャンプが、それぞれ開かれていた。

秋には短大の九州、四国方面の旅行が中止されて、女子高の計画する関西旅行に合流して行われていた。

（つづく）



四十七年度

総会報告

去る六月二十五日は、六月最後の日曜日とあつて、例年のように午後一時半から、短大ホールで総会が開かれました。

いつも梅雨の最中で、毎年お天気を心配するのですが、殆ど降られたことがなく、今年も薄くもりでしたけれど、主催者側もヤレヤレのお日和り、七十余人の方々が出席して下さいました。

学生時代をしのびながら、総会は、いつも礼拝で始められるのですが、今年は西村副会長が司会をしました。

毎年、安藤先生がエレクトーンで讚美歌を弾いて下さるのを、英文科ラボの新海さんがテープにとって下さって、当日の機械操作を一切やって下さいます。

礼拝の後、幹事長の御園先生から四十六年度の会計報告、事業報告などがあり、新年度

の子算案審議がありました。出席して下さいました会員の皆様から承認されました。(後記の会計決算、予算報告をごらん下さい。)

総会の事務報告は以上ですが、今年は、この三月で定年を迎えられた柴先生の感謝会が総会のプログラムの中に組み入れられましたので、引き続き、そのご報告をします。

柴先生

定年記念感謝会のこと

柴先生が短大へいらしたのは、昭和二十三年四月で、短大の前身である女子専門学校の専任教授として、社会思想史、社会史、歴史等を講義され、以来今日に至るまで、文字通り、短大の歴史と共に歩んでこられました。

数千に及ぶ、卒業生で柴先生の薫陶を受けた者にはなく、特に二部の学生の指導に、力をお入れ下さって、学業、生活、両面のアドヴァイスをされたという事です。

記念の感謝会では、先ず、先生のご在任中、学長時代の長かった相川先生からは特に先生の信仰の面について、又、現学長の林先生からは、教師としての先生について、ご紹介

介と感謝のご挨拶がありました。

同時に、林学長から、学校の近況報告があり、新しく建てられた体育館と来春開講する幼児教育科新設と、現在建設中の校舎について、ご紹介がありました。同窓会から、ささやかなお祝いとして、体育館のトレーニング室にかけの鏡を差上げることにになり、その席上で目録を贈呈しました。

さて、柴先生の多方面に亘る、博学は衆知の事実ですが、最近、特に中国問題に造詣が深いと伺いましたので、先生の中国観といった内容のお話をお願いしましたら、約一時間間にわたり熱弁をふるって下さいました。その後、先生のアドヴァイザグループの卒業生、ご出席の先生方から、先生の思い出を語っていただき、先生には花束と記念品としてオメガの腕時計と金一封を差上げました。



この為に、沢山の卒業生の方々が、寄付をお送り下さいました。改めて皆様方の協力に、心から感謝申し上げます。

最後に記念撮影をして、出席者の方々は新体育館を見ていただくため、ご案内しました。当日、ご欠席の皆様も、折がありましたら、ぜひ、学校へいらしてごらんになって下さい。

××××××××××××××

◇さて、総会が終了すると、毎年、つくづく思うことがあります。「ヤレヤレ、これで、宿題の一つは終わったけれど、この内の何人の方が、来年、又来で下さるかしら……。」といったもいつも、不満足な結果に終わったような空しさ、ああすればよかった、こんな事が失敗だったという反省文が残ります。

プランをする者としては、出席して下さる方全部が、「ああ、来てよかった」という満足感を味わっていただきたいと思うので、ついつい盛り沢山の、欲ばった内容を計画してしまつては、いつも（時間が足りなかった）（先生方とお喋りする時間がなかった）（何年ぶりのお友達と、もっとがやがやする時間がほしかった）ということになってしまいます。

今年の会を終えてみて、特にその感を強くしました。同窓会の総会というのは、事務報告はしなければならぬけれど、あとは、只会場を提供している方で、プログラムは作らない方がよいのではないかと……。来年は、思い切つて、皆様方に、ただ集まっていたら、ワイワイガヤガヤの会にしてみようかと思つています。

今は学校にいらっしやらない先生、現役のバリバリの先生、そろそろあっちこっちが痛いなどという話題の出る卒業生、前途洋々夢一杯の卒業生、種々雑多集まつて、好きなことを、好きな丈、お喋りしていただくというのが、こういう会の一つの魅力であるべきかと思つています。

来年の会にご期待下さい。

最後に、総会の準備、後片付け一切に、協力して下さった事務局の皆様と学内卒業生の皆様方に心から、お礼申し上げます。

それぞれの忙しいお仕事の間、会のために労力を提供していただき、その為、会の活動がつつけられますことを卒業生一同にかわつて、誌上をおかりして感謝申し上げます。

（古城房子記）

☆編集委員の紹介

編集委員長・青木千恵子（短英2）

前回にひきつづき編集の責任をもつて下さいました。しゃれたカット描き、割り付けなどベテランで安心しておまかせしていますが、どんどん仕事をすすめて下さつて感謝しています。

編集委員・神藤敬子（短国2）

四十六年度から教務課に勤務、編集会議では、どんどん新しい意見を出して下さいました。編集委員・高橋美奈子（短英21）

四十七年四月から、英文科語学演習室に勤務、お忙しい仕事の合間、一生懸命お手伝い下さいました。



—感謝会出席者—

香 葉 会

昭和 46 年度 決算 及び 昭和 47 年度 予算
 (自昭和46. 4. 1 ~ 至昭和47. 3. 31) (自昭和47. 4. 1 ~ 至昭和48. 3. 31)

摘 要		昭和46年度予算	昭和46年度 決 算	差 引	昭和47年度予算
取 入 の 部	会 費	936,000 (@2,400×390人)	936,000	0	1,107,200 28,800 {@3,200×346人} {@2,400×12人}
	合同よりの援助金	390,000 (@1,000×390人)	390,000	0	358,000 (@1,000×358人)
	前年度よりの繰越金	112,010	112,010	0	270,600
	サンヨー会基金還付金		450,000	450,000	
取 入 合 計		1,438,010	1,888,010	450,000	
支 出 の 部	事 業 費	450,000	366,533	83,467	520,000
	総 会 費	50,000	63,722 △	13,722	100,000
	通 信 費	80,000	48,004	31,996	80,000
	交 通 費	50,000	32,158	17,842	60,000
	事 務 費	20,000	5,770	14,230	50,000
	新 入 員 費	60,000	28,633	31,367	60,000
	給 与 費	50,000	28,800	21,200	45,000
	の 他 費	0	0	0	220,000
	予 備 金 費	63,010	8,790	54,220	52,600
	同 分 担 金	30,000	0	30,000	40,000
	基本 金 勘 定 へ の 繰 出	507,000 (@1,300×390人)	507,000	0	465,400 (@1,300×358人)
	基本 金 勘 定 へ の 繰 出	78,000 (@200×390人)	78,000	0	71,600 (@200×358人)
	次 年 度 へ の 繰 越		450,000	△ 450,000	
		270,600	△ 270,600		
支 出 合 計		1,438,010	1,888,010	△ 450,000	1,764,600

同 窓 会 の し く み

合 同 同 窓 会

香 葉 会

関東学院女子高等学校
 関東学院女子専門学校
 関東学院短期大学
 関東学院短期大学二部
 関東学院女子短期大学

六 葉 会

関東学院六浦中学校
 関東学院六浦高等学校

燦 葉 会

関東学院大学
 関東学院工業専門学校
 関東学院経済専門学校
 関東学院高等商業部
 関東学院社会事業部
 関東学院神学部

檜 櫨 会

関東学院中学校
 関東学院高等学校

母校ニユース

☆体育館完成

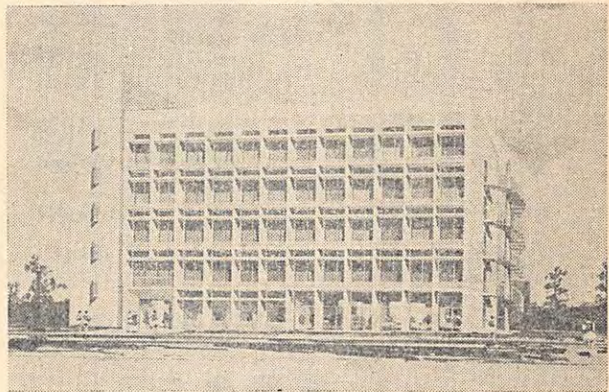
前号の母校ニユースでお知らせした体育館は予定通り完成し、その献堂式が四十七年三月二十九日盛大に挙行された。迎える四月の新学期より体育の授業は勿論、クラブ活動にも使用されている。ご来校の折、ご見学下さい。

☆幼児教育科増設予定

キリスト教学校の保育科は各方面よりの要望が強く、十年程前より将来案の中には組み込まれていたが中々実現しなかった。

一昨年女子寮裏手ハンソン山跡地に女子短期大学が将来移ることが決定し、その折懸案であった保育科の増設が取り上げられ、昨年の春より教職員で構成する委員会が発足して学長を中心に種々準備を進めてきたが、名称は幼児教育科(幼稚園教員並びに保育園保母の資格が得られる学科)に決定、目下文部省および厚生省に認可申請中です。

これと並行して幼児教育館(建築計画第一期)が建設中で、明年二月末には完成する。



—幼児教育館完成予想図—

香葉会事務局と

石垣さんのご紹介

同窓会の事務処理という仕事は、結構大変なものです。学外の者が、多少の時間と労力を提供する丈ではとても、手も足も出ないという状態で、今までは、学内の各研究室や



事務局におつとめの卒業生の方々が、分担して手伝って下さいましたが、会員がふるるに従って、次第に片手間ではかた

づかない大きな負担になり、専任の事務職員をお願いしてほしいというのが皆の要望でした。

それで、今年三月短大の食物栄養専攻を卒業されて助手をしていらつしやる石垣昌子さんが、週二日(月、金)同窓会の事務を手伝って下さることになりました。芳紀二十一才現代っ子らしく、のびのびと明るいお嬢さんで、仕事に対する真剣な熱意や、こまやかな心遣い、礼儀正しく謙虚な態度には、いつも感心させられます。庶務課の鶴見(旧松林)さん、座間さんが、直接、丁寧に仕事の引継ぎをやって下さり、蔭で色々助けて下さるの

で、石垣さんも、一生懸命、てきぱきと仕事をすすめて下さり、会の活動が一段とやり易く、助かっております。

また専用の部屋はなく庶務課の一隅に机一つの間借りですが、短大が新校舎に移転した暁は、どこか小さな部屋でもいただけるかもしれせん。とにかくまがりなりに会の窓口

ができましたので、月、金両日は気軽にお開
合わせ、ご連絡等にご利用下さい。感じのよ
いお嬢さんがお相手をいたします。

(古城記)

☆リトリート

恒例の新入生春のリトリートが天城山荘で
行なわれた。英文科は入学式翌日の四月六日
から八日まで、国文科、家政科は同十日から
十二日まで、いつもの通り二泊三日の日程で
あった。春爛漫のなかを三島からバスで山荘
へ向かう。伊豆地方のひなびた家並みや自然
の親しいながめは、例のバス車掌の案内語り
とともに、いつも変わらぬままである。しか
し学生たちは年々新しく入れ変わる。そして
このリトリートから、実質的な学園生活にス
タートする。みなさんもかつて経験されたよ
うに、新入生は入学早々のこのリトリートを
通して、多く学園生活二年間の友を見出すも
のようである。

主題は「道標」。講師として捜真バプテス
ト教会牧師天野功先生をお招きしたが、キ
リスト教との出会い々ということを中心に、自
己の発見、他者の発見、ライフ・ワークの発
見ということを青春に発見すべき三つのこと

と論及された主題講演は、期待に胸ふくらむ
新入生諸君にとって、おのずと一つの意味深
い「道標」となった。その他「学生生活」を
めぐるパネル・ディスカッションでの二年生
からの貴重な体験的アドバイス、グループ懇
談会、スライドによる学院物語、レクリエー
ション、親睦会など盛りだくさんなプログラ
ムによって、参加者のひとりひとり、それ
ぞれにいろいろな笑りの種と思ひ出を、身の
裡に覚えながら山を下りた春のリトリートだ
ったことである。(学生主事 杉野要吉)

☆英文科より

今回は新しく高橋博先生をお迎えし、スタ
ッフ一同張り切っている英文科を特に取り上
げてみました。先生は英語演習、英文作法、
英文講読などを担当されております。では先
生から一言……………

『縁あって四月から短大に勤めさせていた
だいていますが、周囲の皆様、大変親切な方
ばかりで、本当に良い学校に奉職できたもの
と心から喜んでいきます。この三月までは男子
の高校生を相手にしていましたので、やや勝
手が違いますが、数年前に勤めていた商業高
校(女子が八割)での経験を活かしながら、お
互いに勉強していきたいと思っております。』

専門は古代英語(A・D七〇〇一、一〇〇)
ということになっていきますが浅学非才、その
入口までも達し得ない状態です。ただ古英詩
の魅力に我を忘れたり、古代英語の統語法の
想像以上に確立された姿に驚嘆したりしなが
ら研究を進めています。この三月三日に長女
をもうけ、その命名に苦労しました。「雛祭
の日に女の子」とは縁起ものと、「ヒナ」の
「ナ」を奈に当て、奈実としました。姓との
かねあい、画数その他で判断すると「将来玉
の輿に乗る良い名前」とは野末陳平先生のお
説でした。現在、我が家の主役、すでにお転
婆ぶりを発揮、ホトホト手をやいてしまいま
す。自己紹介のつもりが子供の紹介になっ
てしまいました。どうぞよろしくお願い致し
ます。』

加藤紀子先生を中心に、英文科誌「Can-
pus」第三号の編集に取りかかっております。
語法研究、エッセイ、読書感想文等が掲載さ
れ、号を重ねるごとに内容がバラエティーに
なってきたております。卒業生の皆様、どうぞ
おたよりをお寄せ下さい。また、語学演習室
(ラボ)では、四月からテレビの英会話の番
組をビデオテープが教材としてお目見をする
のも間近ですので、どうぞお楽しみに。

☆退職者・新任者

十年計画の校舎拡張と、発展し続ける短大の中で、三月に学生主事補の内山順子さん、英文科奥田妙子さん(短英15)、教務課渋谷香代子さん(短英20)が御結婚のため退職され七月に家政科細田昌子さん(短家18)、九月には国文科益川良子さん(短国1)が、それぞれ道の進まれることとなり、又、一月のおめでた近しと英文科宮地みさ子さん(短英17旧佐藤)が退職されました。事務職や副手として御活躍なされた皆様に代わり、四月以降に待望の香葉会事務、家政科副手として石垣昌子さん(短家21)を始めとし、次の方々が就任されました。英文科高橋美奈子さん(短英21)、安芸よう子さん(短英18)、家政科細見愛子さん(短家17)、教務課馬瀬俊子さん(短英20)、学生課赤井紀子さん(短国5)、菊地尚子さん(短英17旧山田)、国文科飯山美知子さん(短国3)以上が母校の発展に貢献されております。

☆四十七年度新幹事紹介

幹事長・御園和夫(短英二・13)
長い間、女の園の中の独身男性として、注

目を一身に集めていらっしやいましたが、とうとうその特権を放棄され、青学大御出身の奥様とスイートホームをもたれました。学内の先生というお立場から現場の声がよく外に通じるようになり、両方をまとめて会の仕事をスムーズにすすめて下さることに感謝しております。

学内幹事・陶山正代(短家17)

卒業以来、被服の副手をつとめておられます。幹事をして下さったこともあるので様子をよくのみこんで幹事長を助けて下さっています。

学内幹事・細田昌子(短家18)

陶山さんと共に被服の副手として忙しいお仕事のお合い間、積極的に会の為につくして下さいさっておりますが、ご専門の勉強に進まれるとかで、急に退職されましたので補充を目下学内においております。

その他の幹事は前年度と同じです。

編集後記

駆け足でやって来た秋。それも又駆け足で去ろうとして、野山を染め、見る見る寂しい

冬へと木々は枯れ急ぐ……。

編集のスタートは夏休み前に切られた。夏休みが人々の筆を止め、原稿の集まりが悪かったが、木の実の出揃う頃、その苦戦は解消され初め、九月下旬から十月初めにかけて編集、割付終了。

学内の編集委員は原稿集めに駆けずり廻って御苦勞様でした。

今年は夏休み返上で御多忙だった事務長さんが、その仕事の合い間を縫っての強力なバック・アップ。又、蔭で会長さんも編集に協力下さったり、そんなこんなの力のよせ集めで、よちよち歩きの編集部ながら予定をあまり遅れないで印刷屋渡し、そしてほんと一息。葡萄を食べながら出来る「香葉」三号の事を想像する。不出来かも知れないが、同窓生の皆様、何卒香葉を可愛がって下さい。

同窓会誌とは皆様の育てるもの。今後増々多くの御意見なり随筆、随想、又、同窓生のあれこれ、御寄せ下さって「香葉」を育てたいと思ひ、最後に御協力下さった方々に感謝し、なお一層の御協力をお願いして、編集の言葉したいと思います。

編集委員長 青木千恵子

関東学院女子短期大学

幼児教育科増設（申請中）

（幼稚園教諭・保母課程）



英文科

〈語学コース・文学コース〉
〈司書・司書教諭課程〉

国文科

〈司書・司書教諭課程〉

家政科

〈家政専攻・食物栄養専攻〉
〈栄養士課程〉

●昭和四十八年度入試要項

募集人員

英文科

一六〇名

国文科

一〇〇名

家政科

一七〇名

（食物栄養専攻

八〇名）

幼児教育科

九〇名

〈試験入学〉

八〇名

出願期間

第一期 一月二十九日（月）

第二期

二月八日（木）正午必着

試験日

第一期 二月九日（金）

試験科目

第二期 三月九日（金）

英文科

英語Bの外に、国語、社会（現代国語、世界史B、日本史）から、科目選択。

国文科

国語（現代国語、古典乙）の外に、社会、外国語（世界史B、日本史、英語B）から、科目選択。

家政科

国語（現代国語）の外に、社会、理科、外国語（世界史B、日本史、化学B、生物、英語B）から、科目選択。

幼児教育科

家政科と同じ。

〈推薦入学〉

出願期間

第一期 十二月十一日（金）

第二期

十二月十八日（月）

第一期

一月十日（水）

第二期

一月十七日（水）

面接日

第一期 十二月二十日（水）

第二期

一月二十四日（水）

◎入学案内

〒共二七〇円

（注）幼児教育科の募集開始

は設置が確定する二月前です。

香葉 第3号

昭和47年12月5日 印刷・発行

関東学院同窓会・香葉会

代表者 古城 房子

横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236

関東学院女子短期大学内

電話《横浜045》781-2001（代表）

781-0148（直通）

印刷所 明光印刷株式会社

關東學院同窓會・香葉會誌